

学校教育目標	
「えがおいっぱい げんきいっぱい ひらめきいっぱい かがやく子ども」 ○確かな学力により主体的に考え、よりよく解決する力を育みます。(知) ○公共心や規範意識、礼儀を大切に作る豊かな心を育みます。(徳) ○健やかでたくましく、しなやかな体を育みます。(体) ○地域や社会のために他者と協働する力を育みます。(公) ○多様性を尊重し共生する力を育みます。(開)	
教育課程全体で 育成を目指す資質・能力	具体化した資質・能力
＜言語能力＞ ＜協働して課題を解決する力＞ ＜自分づくりに関する力＞	創造的に思考する力 集団の中で、主体的に自分の役割を理解し行動する姿勢 伝え合うことで集団の考えを発展させる力 よりよい社会の実現を目指す態度
中期取組目標	
○対話を大切にし、主体的に課題を解決する子どもを育みます。 ・一人ひとりの子どもが学習の楽しさを実感し、主体的に問題発見や課題解決に取り組むことができる授業づくりを推進します。 ・人との関わりの中で、互いを認め、思いを伝えあうことのできる豊かな人間関係力の向上を図ります。 ・地域教育資源を活かし、「生活・総合」を中心に協働して課題を解決する力やコミュニケーション力を高めます。 ・教職員間の連携や相互啓発を促進し、学校教育目標の実現に向けて活力ある組織的な取り組みを行います。	

学力向上アクションプラン

重点取組分野	具体的取組
生きてはたらく知	①主体的に問題発見や課題解決に取り組む授業を行う。 ②朝のスキルタイムを活用し基礎基本の定着を図る。 ③GIGA端末やICT機器を課題や目的に応じて活用し、自ら学ぶ能力や態度を養う。
担当	学習評価部

学力向上に関わる本校の状況	今年度の目標
低学年では、学び方は定着してきている。良いところを見つけ、素直に称賛することができている。また、友達のよいところを見つけたり、称賛したりできる場面を生活や学習場面で多く設けたことによって、お互いに認め合うことができることが多くなっている。さらに、表現方法の選択肢を与えることで、自分の意見や気持ちを伝えられるようになってきた。 中学年では、自分の意見を他者に分かりやすく伝えるためにはどのように伝えたらよいかを考え、工夫して伝えることができるようになってきた。GIGA端末を活用して学習に活用する力が高まったが、モラルに関する指導はさらに力を入れる必要がある。 高学年では、学び方を選択する場面を設けることで、自分に合った方法で学びを進めることができた。自力解決の意識は高い。協働的に解決する力を伸ばしていきたい。朝学習や授業の中でデジタル教材を活用することで、基礎基本の定着を図ることができた。また、様々な学習形態を取り入れたが、児童は柔軟に学び方を習得することができた。友達の意見を受け止めて聞いて、つなげて発言できるよう、各教科で意識的に指導した。総合的な学習の時間を中心として、様々な方と関わったり、模擬体験をしたりと実感を伴った学習を進めることができた。こうした主体的な学習は、意欲を高め、課題解決的な学習に一役買っている。ただし、何をしたいかに意識が向くあまり、自分の力がどう生かせそうか、集団としてどう活動すべきかを考え、見通しをもって活動を組み立てることにについては、まだ伸びしろがある。相手の話を聴いて反応するということについては個人差が大きく、対話的な学びが実現できているとは言えない。特に、「聴いて反応することは意識できたが、その後双方の意見を比較して考えを広げるまでにはいたっていない。また、高学年では、家庭学習の在り方を見直したことで、自ら学習形態を選択し、学習内容を見直すことで、自主的に学習に向かう児童が増えた。	○自立した学習者となることを目指し、主体的で探究的な児童を育みます。
目標を実現するための具体的行動プラン	
上半期	【低学年】 ・友達を考えや気持ちを分かろうとするために、あいづちをうつなど反応して聴くよう指導を積み重ねる。 ・学習内容だけでなく、学び方を学ぶことを大切に指導する。 ・友達の良いところを見つけたり、称賛したりする場面を生活や学習の中で多く設ける。 【中学年】 ・意見を伝えるための話型を示し、他者に分かりやすく伝える力を育てる。 ・GIGA端末を対話や個別最適な学びのために活用することを意識して指導するとともに、情報モラルの指導にも力を入れる。 【高学年】 ・自分に合った学び方を試行しながら、主体的に学ぶ。 ・実感を伴う学習体験を大切に。また、学習したことが生活場面でどのように活用されるかを紹介するなどして、学習意欲を高める。 ・「聴いて反応する」ことに重点を置く。友達の意見と自分の考えの共通点や相違点を意識する。 ・話し合い活動やディベートなどを意図的に設定し、自分の考えをアウトプットする経験を積む。
下半期	【低学年】 ・教科や課題にあった学び方を定着させる。 ・自分の考えを言葉にして伝えられるように指導する。 【中学年】 ・相手の思いを受け止めながら聴き、考えを共有する力を育てる。 ・GIGA端末を対話や個別最適な学びのために活用することを意識して指導する。 ・コミュニケーション能力が身につくように教科横断的に指導する。 【高学年】 ・自立した学習者となり、創造的に思考する姿勢を奨励する。 ・学習内容や学習の手段などを児童に委ねる場面を設定するとともに、教師が適切な学び方を個別にコーディネートする。 ・「聴いて反応する」ことに重点を置く。相手の立場や意図を明確にして、考えを広げたりまとめたりする。 ・コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力が身につくように教科横断的に指導する。

豊かな心の育成推進プラン

重点取組分野	具体的取組
豊かな心	①生活・総合の時間を中心に地域・保護者をはじめ様々な「ひと」とのつながりを生かした学習展開を図る。②挨拶を通して豊かな人間関係力を育む。③なかよし学級との交流の充実を図る。④重点研究では生活科・総合的な学習の時間の研究・研修に取り組み、対話を大切にした学習展開を図る。
担当	人権教育部

豊かな心に関わる本校の状況	今年度の目標
生活・総合の時間を中心に、人とのつながりを通して様々な人の思いや背景を知ることにより、価値観を広げたり深めたりすることができた。他者や外部機関とつながることで、社会の中の自分の存在や役割に気付くことができた。また、仲間と関わり合いながら学ぶことで、多様性を認め、自分の中にある差別や偏見に気づく機会となった。その気づきは、自分も他の人も大切にし、尊重する心を育てることにつながった。日常的にあいさつをする児童は、多くなった。学習で出会った地域の方とは、その後まちで会った際に積極的にあいさつする姿も見られた。しかし、学校内では声をかけるとあいさつをすることはできるが、自発的に行える児童はまだ少ない。今後も、あいさつをするよさを知り、交わしたくなる関係性が築けるよう指導が必要である。また、なかよし学年の取組を通して、異学年間で思いやりのある言葉かけや関わり方ができるよう、指導を継続する必要がある。 道徳科や国語の授業等を通して、思いや考えを「伝える」受けとめる「想像する」活動を大切にすることができた。特に、道徳の授業では、これまでの積み重ねの成果が表れ、自分の経験をもとに自分の言葉で語るができる姿が多く見られるようになった。正解がない中で本音を語り合う姿が見られるようになり、違いや多様性を認めたり他者の思いに寄り添う心情を育んだりする取組となった。また、高学年での認知症サポーター研修や聴覚・視覚障がい者の方との交流を通して、社会には多様な立場の方々がいることを知り、まちの中の一員として生きることへの意識をもつきっかけとなった。今後、さらに「教育課程全体を通して教科横断的に育成を目指す資質能力(ぐるぐる)」をもとに、日々の教育活動の中で対話を大切にしてい環境づくりを図っていきたい。	生活・総合の時間を要とした学校の教育活動全体を通じた豊かな心の育成を行う。 合理的配慮の提供と指導内容や指導方法の工夫を図る特別支援教育を行う。 夢や希望、目標をもてる子どもを育成する自分づくり教育を行う。
目標を実現するための具体的行動プラン	
上半期	・日常的にあいさつや返事を奨励する。 ・人のためになることをした児童を意識して認めることでよりよい行動を理解できるようにする。 ・道徳教育全体計画・別業と運動させ、特別活動等の多様な実践活動や体験活動を生かし、児童が自ら問題意識をもつ学習課題の設定をする。 ・道徳研修会を実施し、道徳科の授業における、児童が判断の基準を見つめ直すことにつながる価値把握の在り方や児童が語り合い聴き合う中で考えを深め、振り返りをするための工夫について研究を深め、指導に生かす。 ・違いを認め合う、温かい学級風土づくりに努め、教育活動全体を通じて、自分の考えを表明する機会を積み重ねていく。 ・生活・総合の学習を中心に、地域で体験的に学ぶ機会を積極的に取り入れる。 ・なかよし学級の交流を充実させ、他者との関わりの中で一人ひとりの自己有用感を高める。 ・療育センターあおば、通級教室、学校カウンセラー、SSW等と連携し、ユニバーサルデザイン教育を推進する。 ・子どもの困り感を共有し児童理解を深め指導に生かすとともに、特別支援教室の充実を図る。
下半期	・日常的に自分から気持ちのよいあいさつをしたり、返事をしたりすることを奨励する。 ・主体的に人のためによい行いができるように支援する。 ・年間指導計画に沿った、全学級の道徳授業公開を年一回以上実施し、家庭との連携を図る。 ・学年に応じて地域や社会、関連機関等と関わる学習活動を位置付け、学ぶことや働くことの意義を考えられる場を設定する。 ・生活・総合の時間を中心として、本校の学校教育目標の中で身に付けた力(ぐるぐる)の見直しを行い、日常生活や社会に出たときに「対話を大切にし、主体的に課題解決する力」が発揮できるよう、日々の授業の中でカリキュラムマネジメントを行う。 ・学年に応じた福祉教育を行い、多様な立場の方々 の存在を知り、まちの中の一員としてどんなことができるか考えられるようにする。

健やかな体の育成プラン

重点取組分野	具体的取組
健やかな体	①長縄集会に向けての取組などを通して体力の向上を目指す。 ②学校保健委員会でテーマを決めて健康維持に取り組む。 ③栄養教諭と連携をした食育を実施する。
担当	体育部・保健食育部

健やかな体に関わる本校の状況	今年度の目標
朝食の喫食率は高く、ほとんどの児童が食べてから登校できている。その反面、習い事が忙しく、放課後は学習塾や社会スポーツなどに通うため、友達と遊べない児童が多い。その影響で、睡眠時間が不足している児童が高学年になるにつれ増加する傾向にある。 低学年では、学校保健委員会の取組の一環として、各クラスが健康目標を設定したり、目標に向けて具体的な活動について考えたり、校庭に出て、体を動かして遊んだりするなどの活動を行うことができる児童が多い。また、長縄集会に向けて、意欲的に取り組み、体力を向上させるとともに、達成感を味わうことができた。また、栄養教諭が給食時に声掛けをし、食育につながった。偏食の児童が多いため、食事のバランスを考えることは難しいが、苦手なものの少しは口にできるよう促してきた。牛乳については、苦手な児童は、保護者と相談した上で、コップに少量ついで支援した。 中学年では実行委員を中心として、児童主体で体力づくりや安全を守る活動等の取組ができた。低学年同様、長縄集会に向けての練習に前向きに取り組む、体力向上につながった。また、保健の授業や朝モジュールを活用して、栄養教諭や養護教諭と連携しての指導を行うことができた。食育については、残食をどうしたら少なくなってくるか、食材や調理員さんへの感謝の気持ちなどを折に触れて継続的に指導した。 高学年の体育では、過去の記録や技能と比較して、自分の体力や運動能力の伸びを感じながら運動することができていた。休み時間については、日常的に体を動かす児童とそうでない児童とで二極化している。昼休みが少なくなり、中休みも委員会活動をする児童もいるため、外遊びの機会が減っているように感じる。	主体的に運動に親しんだり、バランスの良い食生活を意識したりすることを通して、心と体の健康を保持増進する。
目標を実現するための具体的行動プラン	
上半期	○学校保健委員会の取組の一環として、各クラスが心と体の健康目標を設定したり、目標に向けての具体的な活動について考える。 ○長縄集会を設定することにより、クラスが協力して練習できる機会をつくる。 ○体育の授業や体力アップシートの活用において一定以上の運動量を確保し、生涯にわたって、健康で安全な生活を営むための基礎的な力を身に付ける。 ○各教科や、生活・総合の学習で、「食に関する指導の全体計画」をもとに、意図的に食につながる学習を行っていく。
下半期	○長縄の練習を重ねることで、記録が高まる喜びや目標達成を友達と共有する達成感を味わえるようにする。 ○体力テストの結果や体力アップシートの状況を保護者と共有し、家庭と連携して体力の向上、生活習慣の改善を図る。 ○学校保健委員会の取組を振り返り、そのことが自分たちの健康推進や心の健康、体力向上につながっていることが理解できるようにする。 ○各教科や、生活・総合の学習で、「食に関する指導の全体計画」をもとに行なった学習が実生活に生かすことができるよう、指導していく。